

# 自虐的な評価が抱えるジレンマ

## —いかにして人は自虐し、それに応じるのか—

岸本 健太(関西学院大学大学院生)

### 1. はじめに

日常会話において、自分自身を低く、自虐的に評価するような発話がしばしば見られる。こうした自虐的な評価に対して、その受け手はどのような反応が期待されるのだろうか。Pomerantz(1984)は、話し手の自虐的な評価(self-deprecation)に対して、受け手が明確に同意することは、相手への批判や批難につながり、無礼な振る舞いや、相手を傷つけるものとしてみなされうるとし、受け手は応答をためらったり、回避したり、不同意を行ったりする、と指摘する。さらに、Pomerantz(1984)は、自虐的な評価への応答について詳細な分類を行っており、不同意する際には、(1) 評価の一部を繰り返す、(2) 否定語を用いる、(3) 自虐的な評価に応じたほめを行うなどの方法を用いることを明らかにしている。他方、同意する場合もあり、その際には、(1) 自分自身もそうだという第二の自虐的な評価を行う、(2) すぐに応答せず、沈黙(間)を置いた後に、受け取り(“uh huh”など)を示す、などの方法が用いられるとされている。

また、自虐的な評価を行うということは、何かの物事について、自分がうまくできないことを示すことでもある。そうした表示は一種の悩みのほめかきとも理解可能であり、自虐的な評価は悩み語りの前触れともとらえられうる。その場合、相手の自虐的な評価に不同意することは、相手の悩み語りを阻害することにつながりかねない。

これらの点を考慮すると、自虐的な評価は、その受け手にとっては同意することも、不同意することも問題となりかねない、ジレンマをかかえる行為であると考えられる。では、自虐的な評価の受け手は、どのような場合に、どういった手法を用いて、そのジレンマに対応しているのだろうか。これまでは自虐的な評価の受け手がどのような応答を産出するかという点を中心として議論されてきたが、本研究では、話し手の自虐的な評価それ自体がどのように組み立てられているのか、という問題により注視しつつ、Pomerantzが示した応答の手法が、「なぜ今使えるのか」という疑問を解き明かしたい。

### 2. 日本語における自虐的な評価

Pomerantz(1984)の研究は、英語を対象に行われていたが、日本語でも同様のことが言えるのだろうか。日本語における自虐的な評価については、もっぱらユーモアの一部として研究が行われている。塚脇ら(2011)の研究では、ユーモアが発話者本人の精神的健康にもたらす影響を調査し、従来では自己破滅的なユーモアは精神的健康に有害であるとされてきたが、過剰な自己犠牲を伴わない自虐的なユーモアは精神的健康に有益であると結論づけている。また、高岡(2015)の研究では、あまり親しくない人と会話するような、配慮や気疲れを起こす対人摩擦場面において、自虐的なユーモアが使用されやすいという可能性を示している。塚脇ら(2011)も高岡(2015)も、日本語における自虐的なユーモアがもたらす効果について、質問紙調査を通して明らかにしようとする心理学的なアプローチによる研究であったが、実際の自然会話においてどのように自虐的なユーモア(自虐的な評価)が用いられているかを探る研究は管見の限りでは見当たらない。

日本語における自虐的な評価は、一般に「自虐ネタ」とも呼ばれうるものであり、上述のようなユーモアとして用いられることは珍しくない。しかしながら、自虐的な評価それ自体は常にユーモアであるわけではなく、それがユーモアであると受け手に理解可能であるならば、ユーモアたらしめる要因が自虐的な評価のうちにあるはずであろう。そのため、「自虐的なユーモア」を正確に定義するためにも、「自虐的な評価」のうち、どういったものが「自虐的なユーモア」になるのか、といった議論が必要であると考えられる。

日本語における自虐的な評価という行為について触れる研究は非常に少ないが、この行為は多様な性格を持っており、その様相を明らかにすることは、人々の相互行為のやり方を記述することを目的とする会話分析における知見のみならず、前述の心理学的な研究や、日本語それ自体の研究への貢献にもつながるだろう。

### 3. データ

本研究で使用した3つのデータは、TalkBankプロジェクト(McWhinny, 2007)によって収集された電話会話コーパスであ

る, CALLFRIEND Japanese から得たものである. また, そのデータの書き起こし(書き起こしについては後述の5を参照)と分析には会話分析の手法を用いた. 書き起こしに用いた記号については, 付記に示す.

## 4. 分析

今回は3つのデータとともに, 参与者たちが, 自虐的な評価が抱えるジレンマをどのようにして克服しているのか. という問題について分析を行う. まずは, どのようにして自虐的な評価がなされるのか, という話し手の側の工夫について述べた上で, それに対して受け手がどのように応じるのか, という受け手の側の工夫について述べていく.

### 4. 1 話し手の工夫

今回扱うデータの共通点として, 話し手自ら, 自身の自虐的な評価を「笑いながら」産出することが挙げられる.

子どもをもつ母親同士の会話である断片1では, Lから「子どもの名前をどうやってつけたか」を聞かれたRが, ファーストネームは夫がつけた, と述べたのちに, 「なんとなく語呂がいいし, 「もうそれでいいんじゃないか」と言っていたことを笑いながら述べる. その後, 子どもの名づけにおいて「あんまりふかく考えていないのよ私たち」と笑みを含んだような声で, 自虐的な評価を行う.

また, 学生のAと社会人のBのやりとりの断片2では, Bが最近ちゃんと三食たべて規則正しい生活を送っていることを話し, それに対しAが「えらいえらい」というほめの次に, あとは運動だけ, という話題に移る. Aが「仕事終わってからジムとかこいけばいい」という提案をするが, Bは笑いながら「I think I can but, ちょっとね, 来週から来週からとか言って」とつい怠けてしまうという自虐的な評価を述べる.

そして, 数年アメリカで留学しているCと, 最近アメリカに留学してきたDの会話の断片3でも, アメリカ人には横柄な人が多いと思っていたが, 実際には人による, といった話をしていたが, 少し前に話題になっていた, Cがスカラシップを取ったことをDが唐突に再度持ち出し, 「スカラシップすごいじゃん」といいつつ, それに対比させるように笑いを多くはさみながら, 「あたしなんてディーとかもう」と, 成績が悪いという自虐的な評価を行う.

これらの3つの事例のように, 「笑いながら」自虐的な評価を産出するという発話の方法をとることで, 当該の自虐的な評価が, 「笑うべきもの」であることを示している. 話し手が「笑うべきもの」として発話を組み立てることによって, その自虐的な評価が, 真剣すぎないものとして理解可能なものとなり, そのうえで同意や不同意を強く求めない姿勢を示すことができよう.

繰り返し述べるように, 少なくとも日本語においては, 自虐的な評価はあるときにはユーモアとして, あるときには悩みのほめかしとして, など多様な受け取り方ができる行為である以上, その受け手にとっても, 同意すべきか, 不同意すべきか, 場合によってうまく選択しなければならぬ, 反応がむずかしい問題である. そうした問題を抱えていることを理解しているからこそ, 話し手の側が自身の自虐を「どのように理解するべきか」という方向付けを一定程度行うことは, 十分に合理的であると考えられる.

### 4. 2 受け手の工夫

話し手の工夫として, 「笑うべきもの」として自虐的な評価を組み立てる, ということを挙げたが, 次にその受け手がどのような工夫を行っているのかを見ていこう.

断片1では, どうやって名前を付けたかを聞かれたRは, 語呂やひびきがよかったからそれでいいんじゃないか, と決めたと答え(28, 30, 36行目), それについて40行目で「あんまり深く考えてないのよ私たち」と自虐的な評価を行う. それを受けたLは, 42, 44行目で「笑い」で応じている. そして, そのまま笑みを含んだような声で「そう, そうなもんだよでもみんな」と, Pomerantz (1984) があげた同意の方法である, 自分自身もそうだと示して同意することがなされている. 加えて, ただ同意するだけでなく, 47行目以降で「よっぽど良い意味がないと, 深く考えたって考えられない」と, 同じ「子どもをもつ親」としての立場からその理由を述べ, 同意を強固なものとしている.

断片1 [CF\_0617]

28 R : でなんとなくこう語呂がいいしhあ.  
 29 L : ° un °  
 30 R : .h[h ¥ ひび ]きがいいじゃない? ¥  
 31 L : [ ¥ゆ h かり ¥]  
 32 L : nhuh  
 33 R : (ふかりな) ひかりグラ[ンドでさ h あ h  
 34 L : [あ:そ h おだね eh [hah ]hah hah hah  
 35 R : [nhnh]  
 36 R : .ha ¥ほんでもうそれでいいんじゃないとか=  
 37 R : =いつ [て h て h ¥  
 38 L : [nh .hih .hih .hih .hihih huhuh [.hih  
 39 R : [hh=  
 40 > R : =¥あん[まりふ]かく考えてないのよ私[たち ¥  
 41 > L : [u k-] [kh kh  
 42 > L : .hih .hih [.hih .hih .HIH .HIH  
 43 > R : [ha hah ha hah  
 44 > L : .hih huh  
 45 > L : ¥そうそんなもんだよでもみんな [hah ¥

次に断片2をみると、30行目の「仕事終わりにジムにいけばいい」というAの提案に対してBは、32行目から「疲れちゃってご飯食べてテレビの前に座ったらおしまい」と、できない理由をのべて、暗にその提案を断る。その暗示的な断りを受けて、Aは「働きますとみんなそんなもんなんだろうな」と、一般的に「働くみんな」がそうなるという推察を行うが、それに対してBは42行目で「いや」という否定を示す。そして、「I think I can but,」と、一度目の理由説明とは異なり、「I=私」という一人称を用いて、笑いながら「ちょっとね、来週から来週からとか言って」と、「働くみんな」ではなく、「自分」が怠けてしまうからできないということを述べる。これに対してAは、笑みを含んだ声に笑いを混ぜつつ、即座に「あー、そんなもんか」と同意でもなく不同意でもない応答を行う。

そして最後の断片3では、6行目でDが唐突に「ね！（Cの名前）すごい！スカラシップってすごいじゃん」と、少し前に話題となっていたことを、あえて持ち出し、Cに対するほめを行う。これに対してCは「うーん、すごくはないけどー」とほめに対して抵抗する姿勢を示し始めるが、話題を持ち出したDはそれを最後まで聞くことなく、「あたしなんてディーとかもー」と笑いを伴わせて、自虐的な評価を述べる。こうした、相手へのほめと対照的に「あたしなんて」と産出された自虐的な評価は、「うらやみ」や「悩み」を強く感じさせるものだと考えられる。これに対してCは笑いで応じるものの、Dの13行目「もう、こんなもう」や15行目「あしたのテストとかで絶対もうなんかもう」、18行目「絶対なんかエフとかなの」、20行目「ぜったい」まで、笑い以外の反応や応答は見せない。Cが見せる、笑いしか示さない姿勢は、順番を取らないことを示すものとしてもとらえることができ、実際にDは自身の順番を少しずつ引き延ばしている。そしてその引き延ばしの中で、「ディーとか」という評価が、「あしたのテストとかで」「絶対なんかFとかなの」と、具体化されていく。「あたしなんて」から始まった自虐的な評価が、「Fとかなの」という発話にたどり着いた時点で、「私は絶対Fとかなの（あなたはスカラシップをとってすごい）」という「できない私とできるあなた」という、うらやみとしての性質が非常に際立ってくる。そして、Dが何度も繰り返す「ぜったい」を聞いたあたりで、Cは「うーん」と順番を取得する姿勢を示し、「それはもう慣れていくしかしょうがないね」と応答する。この発話は、相手からのうらやみ、そしてほめに対して、「慣れ」という自身の能力とは別の問題にほめの焦点をずらす（張、2014）と同時に、相手の悩みについても、それは能力の問題ではなく慣れの問題である、というふうに相手をはげます助言としても機能しうる。また、Cの側もあくまで笑いながらこの助言を行うことで、相手の悩みを真剣すぎるものとして扱わず、相手の自虐を直接に受け取ることをさげていると言えよう。

ここまで見てきた3つの事例を再確認すると、断片1では、自虐的な評価の受け手であるLは、「子どもをもつ母親」という共通するカテゴリーを用いて、相手の自虐に自分の境遇を結びつけることで同意を行っていた。一方、断片2では、自虐的な評価の受け手であるAは、社会人の生活にかんして、少なくとも学生立場から同意や

46 > R : [そうだよ:[uh hhn ]  
 47 > L : [深く考えた]って=  
 48 > L : ¥考えられないじゃん h n n h h  
 49 > R : nh [ ha]hah  
 50 > L : [.hih]  
 51 > L : ° un ° よっぽど何か良い意味がな[-なんかは]ねえ?=  
 52 R : [n h h n ]  
 53 > L : [=おばあさんの]名前とかそん[な.  
 54 R : [n h h n h ] [nhh  
 55 L : .hh こっちで知り合った人の?あ::,

断片2 [CF\_0921]

30 A:n なんかも m-o-仕事終わってからジムとかに行けばいい n .h  
 31 : (0.7)  
 32 B:でもなんか疲れちゃってさあ'  
 33 A:n あhhそ[h a h ]  
 34 B: [>んでご飯<]食べてあ::ってテレビの前に座ったら=  
 35 B:もうおしまい [ HIHih .huh ] .huh  
 36 A: [¥あおしまい. .h¥]  
 37 B:.h[h  
 38 A: [やっぱそんなもんか'  
 39 B:¥n[h¥  
 40 A: [.hh]やっぱそんなあ働きますとみんなそんなもんなん=  
 41 A:だろう[な'  
 42 > B: [や]でも,iya!(.)I think I can but,  
 43 : (0.2)  
 44 A:[nh]hn.  
 45 > B:[n ]  
 46 > B:.hh ちょっとね. Huhuh  
 47 A:NH huh heh  
 48 > B:un 来週から来週からとか言って[ huhh huh .hh ]  
 49 > A: [¥あ:そh-そんなもんか¥]  
 50 B:nhh [nh  
 51 A: [.hh そでいつま:(.)で,uu(.)とりあえず一年やってるのか.

断片3 [CF1758]

01 C :u::n  
 02 D :な h n かあとと思っちゃうけどね[え.  
 03 C : [u::[:n  
 04 D : [u::n  
 05 D :.h そっかあ. =  
 06 D :=[↑ね! (あけち) すごい!]スカラシップってすごいじゃ:ん.  
 07 C : [そ:だからねおても- ]  
 08 C :↑ええ?  
 09 D :すごいじゃ:ん.  
 10 C :う:[n-s ぞ]くはな[いけど::']  
 11 D : [ねえ!]  
 12 > D: [faa あた]しなんてもうディー:とかも:oh h  
 13 > D:=[hoh het も]h おh[.hh こんなhもhh ]=  
 14 > C: [uh huh huh] [kuh huh huh huh]  
 15 > D:=[.h ¥ あh したのテストとかで絶対もうなんかも oh hoh ¥  
 16 > C: [huh .HAH.hah.HAH.HAH hah hah hah hah.hah.HAH.ha  
 17 > C:..hah hah hah[hah  
 18 > D: [.hh ¥絶対な h n h か[h hah エフとかなの]  
 19 > C: [hu . HHH huh ]  
 20 > D:=[ぜったい]い[も h oh hoh hoh] hoh=  
 21 > C: [huhuh] [う : : :ん']  
 22 > D:..h[h あ::hah hah hah]  
 23 > C: [.h も:それはも - 慣]れてい h k h しかh=  
 24 > C:=[よ h うが n n h い h ね h ah  
 25 > D: [ah hah hah hah hah hah  
 26 D :.hh も:なんかさああ'  
 27 C :[hah hah hah .HAH ].HAH  
 28 D :>あの-< せいぶ-生物学っていうのバイオロジ-[とかなんだけど  
 29 C : [n h h h h h h=

不同意をすることは困難である。そうした、相手の自虐に自分の境遇を結びつけることができない場合には、「そんなもんか」といったような、ただ情報として受け取る姿勢を見せ、同意も不同意もせず、暗に相手の評価に対して判断するだけの知識や情報がないことを示す、という方法をとっていた。そして断片3では、上の2つの事例とは異なり、CはすでにDの自虐に結びつけられてしまっている状況におかれていた。そうした状況においては、ただ笑うだけに留めることで自ら順番を取得しない姿勢を見せ、相手がさらに話すように仕向けているように見えた。そうすることで、相手の自虐をより具体化させ、Dによる悩みの表出として受け、それに助言するという方法を用いていた。

## 6. まとめ

自虐的な評価は同意すれば相手への批判につながるものの、単純に不同意すればいいものでもなく、受け手がそれをどう理解すべきか、という点においては非常に複雑な行為である。これまでの研究では基本的には不同意の応答が選ばれ、ときには単純な受け取りや、同意が行われるとされてきた。一方、そもそもそうした複雑な行為を行う上で、話し手自身がそれをどのように産出しているのかという問題や、どのような場合にどういった応答を用いるのかという点については、特に日本語においてはあまり議論がなされてこなかった。

本研究では、3つの断片を例にあげ、話し手自身が「笑いながら」自虐的な評価を産出することで、その自虐を過度に真剣なものにせず、受け手が「笑えるもの」として受け取れるようにする、という1つの方法を明らかにした。また、これまで受け手の応答について分類はなされてきたものの、「なぜ今その応答を使えるのか」という点についてはあまり議論がなされてこなかった。本研究ではこの点に焦点をあてて分析を行った結果、受け手は、相手の自虐に対して、無秩序に同意や不同意といった応答を行うのではなく、相手の自虐と自分の立場がどのように結びついているかをはかりながら、それをもとにして、自分が可能な応答を選択していたことが明らかになった。

今回、笑いながら発話される自虐的な評価と、その応答について分析を行い、自虐的な評価と応答の選択の間に一定の秩序があることが明らかになった。しかしながら、当然、自虐的な評価は、英語だけでなく日本語においても、笑いをもなうものに限られない。今後、分析の対象を拡げ、笑いをもとなわない自虐的な評価において、発話者がどのように産出しているのか、また、それに対する受け手の応答がどのように選択されているのかを明らかにし、自虐的な評価という行為と、それへの応答の様相をより精緻に描いていきたい。

## 参考文献

- 張承姫 (2014). 相互行為としてのほめとほめの応答：聞き手の焦点ずらしの応答に注目して 社会言語科学, 17(1) 98-113
- Mac Whinney, B. (2007). The TalkBank Project. In J. C. Beal, K.P. Corrigan & H. L. Moisl (Eds.). *Creating and digitizing language corpora: Synchronic databases. Vol. 1*, pp. 163-180. Houndmills: Palgrave-Macmillan.
- Pomerantz, Anita(1984). Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes. In Atkinson, John, & Heritage, John(Eds.), *Structures of social action: Studies in conversation analysis*. pp.57-101. Cambridge University Press.
- 塚脇涼太・深田博己・樋口匡貴 (2011). ユーモア表出が表出者自身の不安および抑うつに及ぼす影響過程 実験社会心理学研究, 51(1), 43-51.
- 高岡しの (2015). 対人ストレス対処のために産出されたユーモアの分類と出現頻度 笑い学研究, 22, 63-74.

## 付記

書き起こしに用いた記号は以下の表1の通りである。

表1. 発話の書き起こし記号

記号	意味	記号	意味
[ ]	発話の重複	h	呼気
=	前後の発話の間髪なく続く	.h	吸気
(数字)	沈黙の秒数	.	下降調の音調
¥	笑っているような発話	,	継続調の音調
:	音の伸び	?	上昇調の音調
下線	発話の強調	'	やや上昇調の音調